

## 1月26日報道機関等との懇談会 総長発言概要

今年は、私の6年任期のちょうど折り返し点になる。大学改革は重要な課題だが、改革という言葉に踊ることなく、大学として学術の未来のために維持していくべき部分と改革すべき部分をしっかり仕分けし、改革すべき部分への必要な取組みは大胆に行いたい。いまの国内外の情勢を見ると、日本社会の活力を再生させるために残された時間はさほど無いと思っているので、改革にはとにかくスピードが必要だ。

そうした改革の内容は、すでに『行動シナリオ』に掲げているとおりである。いまの取組み状況の概要については、一覧表（別紙参照）に記している。いま秋入学に焦点があたっているが、東京大学を教育面でも研究面でも強化していくためには、こうした個々の取組みを幅広く地道に積み重ねていくことが何よりも大切だと思っており、秋入学と同様、しっかり力を入れて推進していきたい。

また、東北の被災地の復興支援は、やはり東京大学の活動の中でプライオリティの高いものと位置付けている。とにかく継続的な取組みが大事なので、大学の「救援・復興支援室」を中心に息長く続けて行く覚悟を持ち、それにふさわしい態勢をとりたい。

秋入学の構想の内容については、さきに20日の報道発表の際に、清水理事から「中間まとめ」の概要について説明申し上げた。実質的にあまり付け加えることは無いが、この間、いろいろな動きや反応もあったので、いくつかのことを補足して申し上げておきたい。

20日の発表の際に申し上げたように、秋入学への取組みは大学だけで動くことにはさまざまな困難が伴う。ギャップターム（GT）の使い方がうまく組める、あるいは企業等の採用時期や公的資格試験などが動くなどの見通しが立たないとどうにもならない。政府としても検討の体制が動き始めようとしているが、大学として主体的な取組みを着実にすすめていくので、大学の動きを見守りながらしっかりバックアップをお願いできればと期待している。

この秋入学への取組みは、もちろん、大学の国際競争力の強化、グローバル人材のより確実な育成などが目標であるが、やや私の個人的な心情を申し上げると、何よりも、いまの若い人たちが10年後、20年後の社会の中で（徹底したグローバル社会になっていると思うが）自信と実力を持って活躍できるようにしてやりたい。教育に携わる者としてはその思いは非常に強い。

もう一年くらい前になるかと思うが、経済団体の会合で話をした時に、「若い人たちが『内向き』だというのはおかしい。『内向き』に見えるとすれば、むしろ、若者を取り巻く社会の仕組みが『内向き』だからではないか、『内向き』にさせているのではないか。若者を『内向き』だと言う前に、社会の仕組みが『内向き』であることを変えるのが年長者の責任だ」、というやや挑発的なことを申し上げた。私としてもそう言ったこと責任をとるということも、秋入学提案の背景の思いとして強くある。また、学生たちに「タフになれ」「リスクをとれ」と盛んに言っているのに、総長がそうでなくては申し訳が無い。

秋入学については、いろいろな課題が山ほどある。政府や企業からもしっかり支援いただけそうな様子なので、大学としての主体性をはっきりさせ、先頭に立って課題の克服に取り組んでいきたい。課題は大小さまざま、難易度もいろいろである。中には、秋入学は「入学は桜の季節」という感覚からはずれるというご意見もある。日本列島どこでも入学時期は桜の季節というわけではないが、桜には私としても格別の思い入れがある。ただ、大学というレベルになれば、式典という形式と桜の組み合わせでなく、むしろ、GTの始まりといった、これまでの生き方からの大きな転換の機会という実質と桜の組み合わせこそ、いわば「桜の下で覚悟を固める時期」として、さらにふさわしいという気もする。

秋入学は、さきの20日の機会にも言ったように、「打ち出の小槌」ではない。すべてを解決できるものではないが、この秋入学を議論するプロセスで、これからの日本社会の在り方をいろいろな角度から議論することになるし、秋入学のシステムを通じて生み出される人材は、明日の日本社会をしっかりと作ってくれるだろう。大学の方も、この秋入学を議論しそれに取り組む過程で、いろいろなものが変わるだろうし、変えなければならない。国際化対応の体制強化、カリキュラムの質向上、入試の仕組みなど、急速に変化していくだろう。

また、これから、日本語による教育と英語による教育、あるいは多言語の教育と英語教育の組合わせをどうするかということは、しっかり考えておかなければならない。これは私自身もいろいろシミュレーションしているところだが、基本として、英語はグローバル化時代の当然のマナー、コミュニケーションの技術と割り切ることが必要だと考えている。ただ、同時に、国際化、グローバル化は英語化ではないのは当たり前のことで、秋入学をはじめとして国際舞台に展開していく時に、日本語の力や魅力、日本の文化や生活に対する理解や意識は、これまで以上にしっかり培っていく必要がある。

秋入学に関する取組みの態勢は、すでにこれまでも申しあげているように、東大を含む12の大学あたりがまずはコアとして動くことが合理的だと思っているが、この問題を積極的に検討しよう、意欲的に取組もうとする大学も数多い。とくに日本全国のさまざまな地域・地方で、大都市部にある大学では分からないようなGTの組み方の工夫、あるいは採用にかかわる課題といったものもあるだろう。こうした多くの大学も、自ら汗をかこうとする大学には、一緒に取組みに関与してもらおうといいと思っている。

たしか20日の報道発表の際に、これまでとは違った組織の作り方もあるか、といったことを少し申しあげたかと思うが、端的に言えば、一種インターネットのようなウェブ型に近い組織論に基づく仕組みがいいのかなという気がしている。今のようなネットの時代であるし、ある協議体に入るか入らないかという零か一かという組織論は、全国的な広がりを持った今回のような案件では相応しくないと思っている。

同じベクトルで取組もうとする大学であれば、このウェブの世界のどこかに乗って、主体的に、情報の共有や協調した取組みを行えばよい。政府や社会との交渉などの関係でネットの濃い部分、コア部分は必要だが、この濃い部分は移動してもよいし、ネット上の別のところにそれに近いものが生まれてもよい。そうしたウェブ型の組織論で、凝集された力と幅広い連携を自在に組み合わせることができるような態勢で、この秋入学の課題に取組んでいければと考えている。